



DCfIL オンラインセミナー

津田塾大学総合政策学部総合政策学科 赤松良子賞設立記念講演

未来の女性たちに託したい思い

講演録

対談

赤松 良子氏

労働省初代婦人局長・元 文部大臣・現 日本ユニセフ協会会長

×

高橋 裕子 学長

日 時：2020年11月5日（木）16時30分～17時40分

会 場：国際文化会館（東京港区六本木）よりオンライン配信

主 催：津田塾大学 ダイバーシティセンター・フォー・インクルーシブリーダーシップ

共 催：津田塾大学 総合政策学部総合政策学科

津田塾大学 女性研究者支援センター

■ 開催趣旨

津田塾大学では、2021年3月に総合政策学部が完成年度を迎えると同時に、総合政策学科の優秀学生に贈る「赤松良子賞」を設立しました。これを記念して、本学の卒業生でもあり、男女雇用機会均等法の成立に指導的な役割を果たされた赤松良子氏をお招きし、高橋裕子学長との対談講演を開催しました。未踏の道を切り拓き社会に大きなインパクトを与えてきた赤松良子氏から、これから社会に羽ばたく女性たちへメッセージをいただきました。

■ プログラム

【開会挨拶・趣旨説明】

森川 美絵 津田塾大学ダイバーシティセンター・フォー・インクルーシブリーダーシップセンター長・津田塾大学総合政策学部総合政策学科 主任

【対談】

赤松 良子 氏 労働省初代婦人局長・元 文部大臣・現 日本ユニセフ協会会長

高橋 裕子 津田塾大学学長

【閉会挨拶】

萱野 稔人 津田塾大学総合政策学部 学部長



左から赤松良子氏、森川美絵ダイバーシティセンター・フォー・インクルーシブリーダーシップセンター長、高橋裕子学長

開会挨拶・趣旨説明

森川 美絵

津田塾大学ダイバーシティセンター・フォー・インクルーシブリーダーシップセンター長
津田塾大学総合政策学部総合政策学科 主任

ただいまより、津田塾大学総合政策学部総合政策学科赤松良子賞設立記念講演「未来の女性たちに託したい思い」を開催いたします。本日の講演会を主催するダイバーシティセンター・フォー・インクルーシブリーダーシップセンター長の森川美絵と申します。皆様、本日はご参加いただきありがとうございます。このセンター、略してDCFILと呼びますけれども、2018年、2年ほど前に活動を開始いたしました。「変革を担う女性」の持続的育成を目指して、インクルーシブ・リーダーシップに関連した研究活動の拠点となっていくべく、活動しております。本日は、これまで変革を担ってこられた方からのお話をお聞きします。これからの社会の中で変革を担っていくとは、それをどのように進めるのか、こうしたことを皆様と一緒に考えていく上で、先人をロールモデルとする意義を確認する機会として、講演会を開催させていただきました。

そして、この講演会は、総合政策学部総合政策学科にとっては本当に特別な意味を持っております。本学科が設立されて今年で4年目、今年度の終わりには初めて本学科から卒業生が出ます。その本学科の学生に対して送られる賞として、赤松良子賞というものが設立されました。社会の課題に向き合い、その課題を解決する人材を育成するという、本学科の目的に照らしても、この赤松先生の名前を冠した賞を、学科として持たせていただけることは、本当に光栄です。本日は、その赤松先生がやってこられたことを、赤松先生ご自身のお声でお話いただき、それをお聞きできるということで、私も本当に楽しみにしているところです。

それでは、本日ご講演くださいます、赤松良子先生のご紹介を簡単にさせていただきます。赤松良子先生は、津田塾専門学校英語学科を1950年に卒業後、東京大学法学部へ進学されました。卒業後は、労働省、現在の厚生労働省に入省されました。その後、長きにわたって、雇用における女性の差別撤廃、女性の地位向上に携わってこられました。そして、男女雇用機会均等法の立案、成立にご尽力いただきました。労働省婦人少年局長、国連日本政府代表部の公使、駐ウルグアイ大使、文部大臣などを歴任され、現在は、日本ユニセフ協会の会長をしておられます。

本日の講演形式は、本学学長の高橋裕子教授との対談となります。最初の45分は対談形式でご講演いただき、残りの15分は、事前に学生の皆様からお寄せいただいた質問にお答えいただくというかたちで進めていきます。それでは赤松先生、高橋学長よろしく願いいたします。





未来の女性たちに託したい思い

赤松良子氏 × 高橋裕子学長

高橋学長 皆さん、こんにちは。今日は本当に光栄に存じております。赤松先生、お出ましくださいましてありがとうございます。そして、赤松良子賞を創設できること心からありがたく、深く感謝しております。

まず最初に、赤松先生に津田塾とのご縁や思い出を少しお話しいただきたいと思います。今日はたくさんの学生のみならず、世界各国にいらっしゃる卒業生も視聴してくださっていると伺っております。その方々にも届く声を、赤松先生からお願いしたいと思います。

赤松氏 赤松でございます。とても良いご紹介をいただいて、光栄に存じます。赤松良子賞なんて、何だか胸がドキドキするような賞だなと思っています。きっと、いい方が受けてくださるんだろうなと、楽しみでございます。初めての賞ですね。4年済んで、良い方にあげると、とてもうれしいです。

私が津田のときは、あんまり大した成績でもなかったと思うし、いたずらもしたし、とてもそんな賞があってももらえなかったでしょう。けれども、その後私が色々一生懸命仕事をして、一つ大きなことをした。それは男女雇用機会均等法という法律を、労働省の局長のときに成立させたこと。文案をつくって、いろいろと根回しをして、国会に提案して、国会で通ったら法律になる。そういう過程で、男女雇用機会均等法

ができたわけです。この男女雇用機会均等法というのは、「before and after」という言葉があるんです。「before and after 雇用機会均等法」。それができる前と後では、働く女性の置かれている立場が、がらっと変わったくらい大きな影響がある法律です。法律というのは、国会に毎年毎年、たくさん提案されたものがあって、新しい法律ができる。だけど、その中で歴史を変えるというか、そういう大きな影響力のある法律は、そうたくさんはないんです。男女雇用機会均等法はその中の一つだと言って良いんじゃないか。その男女雇用機会均等法の生みの親、母といわれているらしいので、それはすごくうれしい。男女雇用機会均等法というのは、私の一生でやった仕事の中で、本当に第一の仕事。それを皆さんが覚えてくださるのは、とてもとてもうれしい。特に津田の学生さんや卒業生・同窓生が「男女雇用機会均等法というのは、赤松がつくったもの」と、思ってくださったら、とてもうれしいです。今日はそういうことも申し上げるチャンスにもなって、ありがとうございます。

——津田塾との思い出

私は太平洋戦争が終わった時に 15 歳だった。そのあと 2 年間、私の育った大阪に住んでいたんですけど、「津田へ行きたい、津田へ行きたい、東京へ出たい」と、頭に血が上ったようになってしまった。「どうしてそんなに津田に行きたいのかねえ」とみんなは不思議に思っていた感じだった。

津田とのつながりというのは、まずは、私の勉強した女学校の英語の先生には、男性の方で帝大出身が 1 人と、津田を出た先生が 2 人おられた。1 年生のときから英語があるから、1 年生、2 年生、3 年生と、津田の卒業生である 2 人の先生に習った。英語という点では、帝大だから立派な学校なんだけど、そこを出た男の先生は、さっぱり英語らしい英語じゃないんですよね。帝大っていってもね、という感じでした。そんなの当たり前でね、帝大は英語の学校じゃないんだからね。津田は英語の学校だから、英語ができるのは当たり前。とにかく英語の先生は 2 人とも津田で、「やっぱ



りいいんじゃないかな津田という学校は」と思った。それから、私の仲のいい友達のお姉さんが、津田の卒業生だった。その方に私、英語を個人教授で習った。とっても良い方で、津田の話がたくさん聞かせてくれた。私を津田へ行かせたくてしょうがない。写真見せてくれてね。東寮だった

の。寮の生活もとっても楽しそうに聞かせてくれた。私もいいなと思って、「津田へ行きたい、東寮へ入りたい」と思った。

それには、大阪に住んでいたのも、東京へ行かなきゃいけないのね。戦争が終わったばかりの時代は、電車、その頃は汽車だった。汽車に乗るのも大変なんですよ。復員軍人が網棚にまでびっしり乗っかって、もう足の踏み場もない。汽車の小さな入り口から入れないから、窓から入った。満員だからね。窓から入って、しばらくは床へ足がつくまで時間がかかる。揺れているうちにだんだん下がって行って、下へやっと足がつくという感じで、すごい時代の汽車に乗って東京へ出てきた。

それで、津田へ入った。それはうれしいんだけど、そこでの東寮の生活ってというのは、聞いていたことと天国と地獄くらいの差があった。食べるものもろくにないんですからね。

何を食べさせられていたかという、パンはパンでも、穀象虫っていう黒い小さな虫がいっぱい。蒸してあるから死んでいる。いっぱい死んだ虫が入っている虫(蒸し)パンというパン。それと、あとはお芋を畑で。小平だから、畑がいっぱいあるでしょう。津田は運動場を壊して畑にして、お芋つくっていた。なんだか、水っぽいようなまずい芋だったけど、お芋を食べさせるのは、まだわかります。芋を食べさせるのじゃなくて、葉っぱや茎、そういうものまで全部食べて、それでもおなかペコペコって感じの寮生活だった。それでも、津田へ入ったのがうれしかったというような時代だったんです。それが1年、2年になると大分よくなった。3年過ぎ、津田塾専門学校を卒業するときは、寮生活もそう悪くないという感じになっていた。

3年間津田で勉強して、もっと前の時代だったらそのまま英語の先生になって、大阪へでも帰ってお母さんを喜ばせるってなるのだろうけど、私はそれでは物足りなくなっちゃって。時代がやっぱり変わって、もっと上の学校、それこそ帝大へ行けるようになった。でも、帝国大学っていう名前はやめちゃって、東京大学になった。そこで、



津田塾大学 (小平キャンパス)

「東京大学へ行きたい！」となった。それはやっぱり、「津田スピリット」があるとすれば、それなんですよね。「津田スピリット」というのは、「Excelsior」という「より高く」というスピリットだと思うんですよ。

私は津田も十分いい学校だと、そのちょっと

前の時代までは思っていたけど、私は津田を卒業する頃には、「より高く」って思った。帝国大学は東京大学と名前が変わって、女も入れるようになった。それじゃあそこに行きたいとなった。おまけに津田の先輩は、例えば、森山真弓さんだとか色々立派な先輩がいて、津田を卒業して東大へ入った。私の英語の家庭教師だった方は、7つも年が違うから、しばらく女学校の先生をして、今度は、京都大学、京都帝大の経済学部へ入った。津田専門学校は、そういう方がどんどん出るような学校になっていたんです。私も、やっぱり津田だけでやめたらだめなんだなと思って、上の学校東大を目指した。それもやっぱり、津田先生の志だと思うんですよ。今、自分が置かれている立場というのは、非常に恵まれた状態で、それを活かして、それよりよいものを目指せ、と。津田を卒業したら、津田先生のころは、東大なんかいけませんからね、学校の先生になるとか。社会に自分が受けたよいものを還元しなさいと、社会貢献をしなさいよ、あなたたちは恵まれた状態にあるんだから、それを活かしなさいと言われたと、伝え聞いています。そういう気持ちというのは、津田先生から受け継いでいる、私には津田先生の志したものがあるんだっていうふうに思っしまいました。それが私と津田との関係。



高橋学長 ありがとうございます。一言で言うならば、志を高く持つということですよ。赤松先生のご著書の中にも、『志は高く』というご著書がおありだと思いますが、それを「津田スピリット」でいうところで、赤松先生の基盤が醸成されたというお話だったかと思います。

先ほど、一つ成し遂げたことといえば、一番大きなこととして、男女雇用機会均等法の成立だったとお話しくださいました。今の学生の方々はご存じないかもしれませんが、私の世代はこの言葉はよく知っています。先ほどのお話のことで言えば、「before」の世代ですから。雇用の現場では、女性は20代の後半になったら強制的に定年という理由で退職させられたり（「若年退職制」：たとえば就業規則などで定年を男子55歳女子30歳と定めたりすることなど）、あるいは、結婚をしたら退職をしなければならなかった（「結婚退職制」）。私の若い頃、私の20代の頃はそういう時代だったのです。

赤松先生はそのような女性に対する構造的な差別と戦ってこられたわけですが、こういった社会的な課題に取り組もうと先生がされた際に、大変だったこと、あるいは赤松先生ご自身が心がけてこられたことについて教えていただけますでしょうか。そして、特に学生たちに、若い世代に向けて、困難な課題に立ち向かうとき、何を大切に思って、挑戦していくべきなのか、お話いただければと思います。

赤松氏 私の子供のときというのは、何かと言えば「女のくせに」とか「女だてらに」というような言葉が飛び交う時代だった。私おてんばで、女の子のしていることなんか嫌いで、男の子とばかり遊んで、男の子のしているほうが好きだったの。そうしたら、もう朝から晩まで、あいつは女のくせにと言われる。腹が立ってたまらないんですよね。女だからといって、自分のしたいことから排除されるというのは、非常に適当でない。今の言葉だったら「差別」である。これは嫌だ、なんとかそこから抜け出したい、とあって、自分は抜け出し、津田へ行くことによってかなり良い状態になった。でもその次は、世の中から差別を無くしたい、「女が」「女のくせに」とか「女だてらに」だとか言われなくて済むような世の中にしたい、と私は思った。男女雇用機会均等法をつくって、女性に対する差別をなくすのが、私の務めというのかな天職であるというふうに思い始めたのです。



高橋学長 赤松先生はそのプロジェクトを推進していくために、労働省の婦人少年局でチームを牽引してこられました。そこでリーダーシップを発揮していく上での先生ご自身のリーダーシップのスタイルや、またどのようにして困難を乗り越え、財界や

省庁と折衝されてきたのか教えていただけますでしょうか。あるいは先ほど、根回しもしなくてはならなかったとおっしゃいました。どういう風にして、先生はリーダーとして牽引されていらしたのか、具体的な例を挙げてお話しいただければと思います。

赤松氏 私は、男女雇用機会均等法がつくられるだろうか、本当にそんなものができるのだろうか、と言われていた時代から、ずっと局長室に座っていたんです。労働省婦人局局長室は18階にあってね、日比谷公園が見渡せるなかなかいい部屋だったんです。それであるとき、眺めながらどうしたらいいんだろうと考えた。それで一生懸命考えて、ここへ座っていたんではだめだ！ もう明日から、今日の午後から、幸い官用車があるんだから車に乗って、一人ずつ話して歩いて回ろうと思った。雇用機会均等法に反対している人たちは、財界全部とっていいほどだった。あるいは政界だって反対している政治家は多かった。そういう財界だったから、社長だ、会長だ、企業の人みんな、女を差別して何が悪い、女性を安く働かせることによって、もうけが上がってくるんだから、そんなのいけないなんて言われたらたまらんな、という人たちだった。それを一人ずつ、個別撃破。その人たちのところへ局長が出かけて行って、「そういう考えはおかしいですよ」「それはね大分昔の考えで、今のこの世の中では、もう通用しなくなっているんですよ」「それを社長さんのそういうお考えを、外国の実業家の方に聞かせてごらんくださいよ。どんなにそれはおかしいことかって言われますよ」と。私が言って歩こうと思ったの。一人ずつ会ってね。

それで、電話かける。「労働省の婦人局長でございしますが、何とか社長、お目にかかってお話ししたいことがございしますが、よろしいでしょうか」と。女性とはいえ、やっぱり局長ですから、お会いできませんという人はあまりいません。どうぞおいでくださいと言うので出かけていった。そして、今言ったようなことを、縷々(るる)お話しする。やっぱりね、相手は立派な方たちですよ。ちゃんと言うことを受けて、「なるほどね、そうおっしゃることはわかるな」と言ってね。一人ずつ話しているうちに「あんまり大きな声で男女雇用機会均等法反対だなんて言わないようにするか」って、一人ずつ話していくうちにだんだんみんながそう思ってくださるようになってきた。

リーダーシップとって、何も。ほかの人たちは、みんな私と一緒に働いてくれてるんだから、局長が必死になって根回しに歩き回っているのを見れば、自分たちもちゃんとがんばって、局長からこうしなさいといわれたことをちゃんとやらなきゃ

いけないなって思ってくれる。リーダーシップ論なんて、私はその頃から全然そんなもの読んだことないけど、「自分が一生懸命やる姿を見せれば、部下はちゃんとそれを分かってついてきてくれるものなんだな」って思った。それが私のリーダーシップについての考え方。

高橋学長 ご自身でしっかりと歩んで、その姿を皆さんにも見ていただく。赤松先生が根回しに回られたときに、声を失うほどになられたということ、「プロジェクトX」で私たちは拝見いたしました。だからそれまでに、ご自身が努力されている姿を、その後ろ姿を、当該の局の方たちもご覧になっていたということなのですね。

赤松氏 そのとおりですね。リーダーはこうあるべきだ、へったくれだとか言わないで、ちゃんと自分が一生懸命やっていれば、部下の人たちはそれを見てついてきてくれた。それは、ひょっとしたら、私の部下が良い部下だったからかもしれません。もっとへそ曲がりな人がいっぱいいたら、私だけ浮き上がって、あまり成果が上がりなかったことだってあり得ないことではない。でも、私は幸い良い部下に恵まれたんですね。私が一生懸命がんばって根回しして、歩き回って、声を枯らして、本当に声出なくなっただもの。だから、がんばってれば、局長ががんばってるんだったら私たちもやろうと思ってくれたんです。

高橋学長 先ほど、「個別撃破して回られた」とおっしゃいましたが、なかなか撃破しにくい相手も、中にはいらしたわけですよね。「プロジェクトX」の中にそういう方が出ていらっしやいました。今、若い方たちも、これから心が折れそうになるというような困難に直面するときがあるかと思います。赤松先生は、どうやって心が折れないで、それでも個別撃破して回ろうとされたのでしょうか。どのようにして、モチベーションを維持されたのでしょうか。

赤松氏 私はやっぱり自分がしていることは、大変なことだと、歴史を変えるようなことだと思ったんですね。だから100人に会っても、その中で何十人は全然わかってくれない人がいても、それは当たり前。もう一回、また行く。それでもわからなかったら、もう一回くらいのつもりでやらなきゃ。でも100人のうち50人だめだったらだめだけど、70人までOKになれば通るわけだから。最後まで諦めないでやり続けた。

高橋学長 粘り強く、諦めないでということですね。次の質問をお伺いします。総合政策学科と赤松良子賞設立に対する思いは、先ほど冒頭でも少しお話しくささいました。本学が2017年度に創設しました総合政策学部総合政策学科は、多様な人が政策立案に関わっていくということを目指して設立されました。そして、英語力に加えて社会科学、データ分析を土台に、様々な課題を解決する力を、特に女性たちに持ってもらいたいと。そして現代社会におけるあらゆる課題に取り組んでいこうとしております。

本当に変化が著しい今の社会、そして世界の中で、津田塾大学のこのような取組や動きに対して、ぜひ応援のメッセージをいただければと思っております。「赤松良子賞」を今年度どの学生が受けるのか、まだわかりませんが、赤松先生にぜひ総合政策学部総合政策学科に対する思いと、そして期待をお話しいただければありがたいと思っております。

赤松氏 「総合政策学科」なんていうのをよく思いつかれたと思って、感心しているんですよ。津田は英語の学校だから、英語ができるのは当たり前。といつても、やっぱり英語だけ勉強していたのでは、世の中の大きな流れというものをつかむということは、ちょっと難しいんじゃないかな。やっぱり、もうちょっと広がりのある勉強をしないと、実際社会の中でトップというか、トップの次くらいでもいいけれども、その地位に立ったときは英語だけでは十分でないんじゃないかなと思います。私はそういう思いがあるから、津田専門学校で英語をやった後、東大の法学部に行ったのですが、私は両方やっておいてよかったなと思っております。

総合政策学科のアイデアとして、広く社会全体をよく見渡して、分析をして、理解をするということは、とてもいいことだと思います。津田先生は英語だったんだけど、all-round womenとおっしゃったでしょ。all-roundというのは、やっぱり英語ばかりやっていたら、なかなか難しいじゃないですか。もうちょっと広がりのある学問をやったほうが、all-roundになりやすいんじゃないかな。実は、私は津田に入ったときall-roundという言葉聞いて、「この勉強だ



総合政策学科の学生が学ぶ千駄ヶ谷キャンパス

けて、all-roundになれるのかね」と思ったの。なれなかったね。あまり私はall-roundじゃない。今でも、あまりall-roundとは思えないなと思って、反省することが多いんですけど。all-roundというのを目指すなら、総合政策学科のほうがいいですよ。

高橋学長 データサイエンスや社会科学、赤松先生がおっしゃっている社会科学というのも、総合政策学科の大きな柱の一つです。それとあわせて、赤松先生が冒頭でおっしゃったご自身が小さいころから女性であるということで、様々な排除をされるようなご経験をされてきた、それをご自身だけではなくて、社会全体に対してその差別をなくしたり、あるいは女性に対する公正さを実現していくというような、深い思いを赤松先生が感じ続けられてきたことというのが、先ほどおっしゃった「津田スピリット」とも関係してくると思うのです。特に、その「津田スピリット」という部分を、もう少し若い学生たちにお話しいただけますでしょうか。

ご自身が違和感や排除されたと感じた経験を通して、世の中全体に対して、こういうことが起きないように、働きかけていこうという、そういう推進力になっていこうと思われる、赤松先生のお志というものについて、若い世代にお話しくくださいますでしょうか。

赤松氏 この津田のスピリット、津田梅子というのは、まず思い浮かべますよね。津田先生は、あなた方が置かれている立場はとても恵まれたものなのだから、そこで得られる貴重な経験や学識というものを、卒業したら役に立てて、いいことをしなさいよとおっしゃった。それが大事なんですよね。津田先生は、やっぱり布林マー (Bryn Mawr College) という学校からこの考えを持って帰ってこられたんじゃないかなと。

高橋裕子学長の『津田梅子の社会史』という著書を読んで、その中で特に最後の章のマーサー・ケアリ・トマス学長（以下、M. ケアリ・トマス）という、教授から学部長になり学長になられた、あの方から受け継がれているんだと思うんです。それが分かったのは大分あとで、はじめは津田といえば津田梅子と思っていた。だけど津田梅子は、その前の布林マーの時代に培われたんじゃないかなと思う。ということは「長い列」なんですよね。

その布林マーは布林マーでもっと前からあるかもしれない。M. ケアリ・トマ

スから津田梅子。津田梅子から星野あい。星野あいから藤田たき。藤田たきから赤松良子。その間も、もちろん何人もいました。この「長い列」に加わることができたのかなと思うと、できたとすれば大変幸せなこと。この「長い列」という言葉も、津田の教授だった川本静子先生の『女の長い列』という本の題名なの。これ私の愛読書なのよ。始めに書いてあるのは、文学の話だけれど、私は「長い列」って言葉を、文学じゃなくてももう少し広い「女性解放」の長い列と、くっつけて考えているんです。それでいいと思うんですよ。私が思ったのと違ったって構わない。自分が思っている長い列に加わって、自分がそこから先にバトンタッチをするということがとても大事。津田の今の学生さんたち、その津田の長い列があるでしょう。私もその中の一人だと思っただけきたい。津田先生はその前の布林マーのトマス先生から。津田先生、星野先生、藤田先生、高橋先生と、長い列につながってくださいよって、私は今の若い人たちに言いたいです。



高橋学長 ありがとうございます。少し解説しておきますと、津田梅子の恩師である M. ケアリ・トマスという先生は、津田梅子が学んでいる当時、Bryn Mawr College の学部長でした。彼女は毎週、会合で学生たちを集めて繰り返し使っていた言葉が、"Believe in women" という言葉なのです。つまり「女性の力を信じなさい」と。その当時、医学の世界で女性は頭脳が、生まれながらにして男性とは違っている。厳しい学問をすると、生殖機能が冒されてしまう、というようなことが真剣に議論されていた、19世紀末はそういう時代だったのです。だから女性に対してなかなか学問の扉が開かれていかなかった。これはアメリカにおいても同じだったのです。それに対して M. ケアリ・トマスは、生涯をかけて自分は女性にも学問をする力がある、男性と同等に学問をする力がある、ということを実証してみせると。それが自分の生涯

の目的・目標であると、子どものころの日記に記している人だったのです。そういう人物に、津田梅子は学んでいたわけです。つまり、"Believe in women" すなわち、女性の力を信じる、とそのような薫陶を受けて、日本に帰ってきた。そして、官立、今でいう国立の学校であった華族女学校を辞して、自分の教育理念に沿った学校をつくり、"Believe in women" と言えるような、つまり今の言葉で言うと「変革を担うことができるような、そういう女性を輩出していきたい」と、津田梅子は心の底から願って、リスクを選んで、女子英学塾を創設したということなのです。



だから、そういう津田梅子がつくっていった列に、星野あいも、一赤松先生が入学されたときには、星野あい先生は塾長でいらしたのですけれども、私にとっては歴史的な人物なのであえて敬称はつけません、藤田たきも、プリンマーで学んでそういう薫陶を受けた方々が、津田塾大学の源流にいらっしゃった。

そういうことで、壁を破り、天井を破り、さきほどの言葉ですが、「個別撃破」して、世の中を変えていこう、そういう推進力になっていこうという卒業生が、本学からたくさん輩出されているということだと思います。

『女の長い列』。これは川本静子先生というヴァージニア・ウルフなどを研究した、本当に優れたイギリス文学の研究者の本なのですが、その列につながっているのだと、赤松先生はお話くださっているわけです。

これまでにお話くださったこととかなり重なるのですが、「未来の女性たちに託したい思い」というのが今日のシンポジウムのテーマでございます。先生が男女雇用機会均等法という法律をつくられ、この法律のおかげで、現在の雇用の場において、大きな変化が実現されてきています。そして、女性差別撤廃条約を、日本も批准することができました。そして、女性の権利と平等を唱えることが当たり前のこととなっています。

しかし、それにもかかわらず、世界のその他の国々と比較してみると、日本の現状は、まだまだ厳しい状況にあると。特にジェンダーギャップ指数。毎年、年末になると世界経済フォーラムが公表するのですが、昨年、最新のジェンダーギャップ指数が発表された際の数字は、日本は153か国中121位と、底辺を低迷している状態が続

いている状況です。若い世代の皆さんは、男女雇用機会均等法後であっても、こういった世の中に出ていかなければならない。このような現状ですが、日本における女性たちが置かれている状況を、赤松先生がどのようにお考えになっておられ、そしてまた特に今日視聴している本学の学生たちに対して、どのような言葉でエールを送られるか。未来の女性にどういう思いを託されているか。最後にお伺いしたいと思います。

赤松氏 121位と、だんだん下がっているんですね。一体どういうことって思うでしょう。4つの分野でそれぞれに地位がある。4つの分野というのは、1つは健康、2が教育、3が雇用で、4が政治なんですよ。健康は、日本の女性はとてもいい。世界一の長寿でしょう。変な病気もかからないので、いい状態でこれは結構。

次が教育。教育は、特に基礎教育はとてもいいんですよ。4年制大学まではよくて、女性はほとんどもう almost 100 percent でしょう。だけど、大学院のレベルになると、女性がちょっと減るんですよ。これはもうちょっと「より高く」と、思っていたきたい。4年で卒業する場合に、大学院までを目指す人がもっと増えていいんじゃないか。それから、雇用。日本では女性がたくさん働いてるんですよ。だけど、管理職に就く人は少ない。雇っている側の社長さんとか、それこそ「各個撃破」したいくらいですよ、今でも。女は管理職向かないと思っているおじさんたちが多いというのも問題。だけど、女性のほうもね。管理職になれば責任が伴うでしょう。責任が嫌だつていう女性がまだ多いというのも問題。

津田の学生さんたち、卒業生の方へ、「責任を回避するようなことはだめよ」「ぜひ自分から責任を負いなさい」と、私は言いたいです。

それから、最後が政治の分野で、何しろ国会議員の女性の数が少なすぎますよね。なんとかしたいと思って、私はクォーター制推進のため WIN WIN(ウィンウィン)という運動を、代表でやっていますけど難しい。でも諦めないで、皆さん方、応援して



ください。クォーター制というのは、各政党に「おたくの党で女性何割いらっしゃるんですか、もっと増やしてくださいよ」って、「各個撃破」で政党に言いに行っているんですよ。4つの分野の中で一番難しい部分が残っているのが、政治の分野だと思います。

高橋学長 ありがとうございます。学生たちには、「志高く」「Be ambitious」ということですね。それから、次に「責任を取る」ということ。本学総合政策学部客員教授の村木厚子先生もおっしゃっていましたが、昇進する機会があったら必ず受けて、管理職の地位についていく、積極的についていく、そういう思いを持っていようと。そして、政治の場にも、女性の声がしっかりと届けられなくてはならない。そういう分野にも出ていこうと。学生の皆さん、覚えておいてください。

今から、学生の皆さんから事前にいただいていた質問がいくつかありますので、それについて、赤松先生にお伺いします。

まず、「赤松先生が男女平等を実現するために、様々な活動をされていたとき、一番身近にいらっしゃったご家族は、赤松先生のそのような活動について、どのように思われていたのでしょうか」。そういう質問をした学生さんがいらっしゃいますので、赤松先生、お答えをお願いいたします。

赤松氏 雇用機会均等法の成立過程でがんばっていたとき、私の一番身近にいたのは、私の夫でございます。この夫はその当時とても賛成してくれました。それに対して大いにサポートしてくれました。その点は、私は安心でした。

高橋学長 そうですか。赤松先生が津田に入るために東京に行かれたり、あるいはその後、東京大学に進学されたときに、ご両親は応援して下さったのでしょうか。

赤松氏 私の母親は、自分が全然「教育の機会」を持てなかった。田舎、貧乏、女の子と、トリプルパンチなのね。あとでわかったことは、母はかわいそうなことに小学校も出ていなかった。私が言うのもなんだけど、母親は頭はいいんですよ。それなのに、学校出てないってことに対して、非常に引け目を感じていた。その反動で子供を学校へやり、高い教育を受けさせたかった。それは私にとっては、良い、楽なことだった。だから、私が「東京へ行って、津田へ行きたい」といっても、「東京なんか行かなくて、大阪にだっていっぱい学校あるよ」と言わなかった。「行きたい学校に行きなさい」って。

東京へ出るのは大変な時代だった。ものすごく苦勞を母にかけたと思ってます。申し訳なかったという気持ちはあるけど、でもやっぱり私は「津田へ入りたい、東京へ

行きたい」という気持ちがあったから、その後の発展がある。母が自分が教育が受けられなかったことを、子供で仕返しをしようと思っていたことで、私は「得」をした。

高橋学長 そうですか。お父様が画家でいらっしゃるのですよね。私は先生のご自宅にうかがったことがあるのですが、そのときに「良子像」というすばらしい絵を拝見したことがございます。ちょうど赤松先生が東京大学に進学された頃、夏休みに帰省されたときに描かれた絵と、うかがっております。学生の皆さんには、いつかこの良子像の本物をごらんいただきたいと思っています。その絵には、お父様の赤松良子先生にかけていた思いとか、期待とかというものが表現されていると思うのですが、すばらしい絵ですよ。



赤松氏 うちの父親も親バカなんですよね。私の7つ違いの姉に、結婚話が出てきたときに、東大出の男性との話が出たんです。母はホイホイ喜んでいるんだけど、父は「何だ、東大なんか、俺は嫌いだ」といって、大きな声で言ったのを私は覚えているんですよ。父の時代でしょう。父は美術学校を出ているけど、東大出のほうが、世の中で威張っていたじゃないですか。とにかくね、「東大が嫌い」って、父は公言してはばからなかった。それなのに私が東大に入ったら大喜びで、あんな絵を描いている。あれは私が東大に入ったばかりのときの絵なんです。あの絵は私はとても気に入っています。みんな見てくれた方は褒めてくれますよ。赤松良子のいいところというか、お父さんは自分の誇りを込めて描いている、と。そのとおりだと思う。私はありがたくて、あの絵が大好きで、うちへ来てあの絵を見た方は「お父さんが絵描きっていいわね。こんなに残してくれて」と言ってくれます。

高橋学長 本当に将来を予感させるような、そういうインスピレーションにあふれる絵なのです。いつか先生から本学にご寄贈いただけると、私はお約束いただいているので、私たちの学生たちが、インスピレーションを得られることになります。ぜひ本物のその絵を学生たちに見ていただきたいと思っています。

時間がもう大分なくなってきましたけれども、学生のもう一つの質問です。「先生が

学生でいらっしやったときに、津田塾では、当時の男女格差の社会の有り様を、どのようにみんな捉えていたのですか。それは、東京大学の法学部と異なるものだったのでしょうか。当時の赤松先生の学友たち、津田のお友達、あるいは東京大学でのお友達は、日本のこのような男女格差をどのように認識していたのか、どのように考えていたのか。そのあたりについて教えてください」という質問が学生から届いています。



赤松氏 私が津田にいたときっていうのは、戦争が終わって間もなくの頃で、ぱーっと世の中が男女平等って言えるようになった。みんな大きな声をだして言える。それまでは、あまりそんなことを言うのをはばかれた。とってもいい時代になっていた。津田のときはね。

だから、まだ日本は駄目だ駄目だって言っていました。東大に入ったら、何しろ800人の法学部の学生で、女性は4人なんです。女性は大事にされてね。世の中差別があるのは十分知っていたけど、自分自身はとってもちやほやされてね。居心地がよかった。差別は逆になく、むしろ大事にされた。

高橋学長 でも、その大事にされていたというのは、対等に扱われていたということですか。それとも、先生がおっしゃっていたように、ちやほやされていたということですか。

赤松氏 勉強はちゃんとみんなと同じように、大きな教室へ出て、ノートを取って、論文書いて出すので、ちやほやなんかされません。ちやほやされていたのは、課外で

遊んでいたときに、何しろ女の子が少ないから。男の子が大勢いて先輩も女の子が珍しいから、自分がいらなくなった本を持ってきて、くれたりしてね。そういうのがちやほやじゃないかな。

高橋学長 本をくれたりした？

赤松氏 民法だって、刑法だって1年生のときに終えて。自分は2、3年になって、1年に入った子が女子学生だから、かわいいね、と言って本をくれたんです。

高橋学長 そういうことですか。ではもう一つ学生からの質問です。「何だ、女だてらに」と、いろいろ言われたことがあったとおっしゃっていました。具体的に「女のくせに」と言われて腹が立ったエピソードはありますか。この学生さんは、「これまで私は、特に親からは、『女のくせに』というようなことを強く言われて、悔しいと思ったことが少なかったため、お話をお伺いしたいのです」と書いています。

赤松氏 もう今はね、親だってちゃんといい時代になってから生きているから大丈夫。私が子供の頃っていうのは、そんな時代じゃないからね。私の一番上の兄貴なんかは、この家のものは、かまどの下の灰まで俺のものだって言ったのよ。一番上の長男のもの。昔はそうだったんだから。あんな末っ子の女の子なんか、偉そうに言ったって何だあんなものという。腹が立つのね。だから、くそと思ってました。

世の中が変わってね、民法が変わったでしょう。それで、ざまあみろという感じだけどね、世の中もがらっとそういうふうになったし、自分もそれに乗っかって、上昇気流に乗れたのね。だけど、小さいときはそういう兄貴がすぐそばにいたんだから、腹が立ちますよ。

高橋学長 それはすごくわかりやすい、かまどの下の灰まで自分のものだといわれるようなお兄様がいらしたと。小学校ではいかがでしたか。

赤松氏 小学校のときは、まだ男女組に分かれてましたよね。男のほうが頭がいいんだと思っているやつがいっぱいたと思うんです。私はそんなことないと思っていました。それを私は証明したいと思っています。

でもね、長いこと女のほうが頭が、ちょっと落ちるんじゃないかというのを、脳の重さをはかって比べて、女のほうが脳の重さがちょっと軽いというのが、イギリスの研究である。そうしたら、ほれ見ろ、女の脳のほうが軽いじゃないかと。こっちの人が、いや、人間の全体重は、ずっと男のほうが重い、男のほうが大きいんだから、脳だってちょっとくらい大きいのは当たり前じゃないかと。ゾウの脳とネズミの脳とどっちが重いか。当たり前じゃないか、ゾウの脳のほうが重いよ。男と女と比べて、ただ脳の重さだけでどっちが頭がいい、ばかだと、そんな議論は成り立たないという反論が出た。そういう時代。

高橋学長 赤松先生、ありがとうございます。ちょうどお時間となりました。赤松先生からのメッセージ、学生の皆さん、しっかりと心に刻んでいただきたいと思います。今日はありがとうございます。

赤松先生、今日は本当にどうもありがとうございました。学生が赤松先生のお話を聞ける、貴重な機会を与えてくださったと思っております。私もお話を伺っていて、このようなかたちで率直にお話しただけで、本当にうれしいなと思って聞いていました。津田に入るときもどれくらいうれしかったのか。東寮のパンの話や、ご家族の話もありました。このようなお話が聞ける機会というのはなかなかないだろうなと思って、貴重な機会をいただいているなと感じておりました。学生の皆さんも、これがどれだけ貴重な機会なのか、ぜひ理解してほしいなと思います。まずは、赤松先生に、この点に関して、お礼申し上げたいと思います。

さらに赤松先生にたくさんお礼を言いたいと思っています。次の点が、「赤松良子賞」を創設させてくださった、ということです。赤松先生の今日のお話にもありましたけど、まさに、津田塾大学総合政策学部の課題解決力を養うという教育理念を体現している方なんですよね。道なきところに、男女雇用機会均等法という道をつくって、それ以前にも、道なきところをずっと道を切り開いて進んでこられた方です。今日、いかに男女雇用機会均等法が当時、誰も想像できなかったのかというところをお話しただきましたが、そういったところで、パイオニアとしてずっと道を切り開いてきた方です。総合政策学部が目指している、課題が山積しているこの世の中で、どんなに小さな課題でも、解決の道筋を見つけて、道なき道に道をつくっていく、そんな力なんですよね。赤松良子先生が体現されているような、この学部の卒論賞に、赤松良子賞という賞を創設してくださった。そういった、創設を認めてくださったということ、2点目として感謝したいと思います。

総合政策学部と赤松良子先生の関係はさらにあります。赤松先生は2015年まで本学の理事をされておりました。総合政策学部は2017年の4月に開設されましたが、準備はその何年も前から始めていました。私もその準備に関わってきたのですが、数年間、赤松先生が理事でいらっしゃったときと、私が準備していたときが重なっているんです。私



は何度か準備の過程で理事会にも出席して、いろいろと進捗状況を説明していたときに、非常に力強いお言葉をいただきました。この学部をつくるという作業で、非常に勇気を与えてくださって、背中を押してくれた方です。少し僭越かもしれませんが、赤松先生と一緒に学部をつくることができたかなというのがあります。この件も、また改めてお礼を申し上げたいと思います。今日は、「総合政策学部なんてよく思いついたと、感心しました」という言葉をいただきました。私としては、密かに褒めの言葉をいただいたんじゃないかなと、うれしく受け取りました。その点でもお礼を申し上げたいと思います。

学生の皆さん、本日の赤松先生のお話で、女性の長い列に加わってほしい、責任を負うということを回避しないでほしいと、色々な言葉があったと思います。まさに、赤松先生だからこそ、重みがある言葉だなと思って私も聞いていました。ぜひ、今日の話の糧に、少しずつ、皆さんも前に進んでいただきたいなと思います。赤松先生、今日は本当に貴重な機会を与えてくださり、ありがとうございました。私の挨拶は感謝を申し上げるかたちで終わりにしたいと思います。

DCfIL オンラインセミナー

津田塾大学総合政策学部総合政策学科 赤松良子賞設立記念講演

未来の女性たちに託したい思い 講演録

2021年3月1日 発行



津田塾大学
TSUDA UNIVERSITY

編集・発行

津田塾大学 ダイバーシティセンター・フォー・インク
ルーシブリーダーシップ (DCfIL)

〒187-8577 東京都小平市津田町 2-1-1

TEL 042-342-1662